観察者と保育者の対話(8)

観察者から保育者へ

先日（六月十一日）は観察をさせていただいてありがとうございました。五歳児総勢三十五名のクラス、一人の休みもなくにぎやかな日でした。初めての訪問ですと、なかなか視点が定まらず保育の流れが見えにくいこともあるのですが、子どもそれぞれが目的をもって（もとうとして）過ごしているように見受けられました。月曜日ということもあり、ウサギやモルモットの小屋掃除の当番はなかなか大変な作業でしたが、手際よく協力してやっていて感心しました。先生も、「もうやってくれていたの！　すごーい」と驚いていましたよね。数名の仕事の分担がよく協力できており、小屋の底板を水道場で洗っている場面では、好きなテレビアニメの話題で世間話などしながら、いかにも楽しそうで、生活の中に当番が根付いているような印象を受けました。六月という時期で、素晴らしいですね（水に触れるのもうれしい季節だということも関係しているかもしれませんが）。

保育室の一隅を大型積木やフェンスで囲んで、（多い時は）五人のグループでままごとをしている女の子たちがいましたね。見始めた時は、すでにテーブルが出ていて、その周りで五人が対等な関係で話をしているように見えたのですが、少し体の大きいA子が急に、「何でこんなに集まってんの」とちょっときつい口調で言い、それでほかの四人が一瞬静かになるという場面がありました。見ていた私もいささか緊張を感じ、五人の関係が必ずしも安定したものではないのだろうと思いました。その直後、何となく五人のかたまりが一時ばらばらに分散し（一部は輪から離れ）、ま

たすぐ集まった時には、A子を中心とする三人と、B美ともう一人の二人のグループに分かれて、それでも一緒の空間で、時々やりとりするままごとが展開していきました。いろいろと会話はありますし、「一緒の小学校にいきたいね～」というような話をしつつ、でもどこか、お互いの関係をまだ探り合っているような五人の女の子に見えました。

保育者から観察者へ

今回は観察に来てくださったことで、普段聞き取ることができない子どもたちの会話や細かい動きや姿までも知ることができ、保育の参考になりました。当番活動ですが、「生き物を大切にする気持ち、親しみをもつ」ことと「グループの友達と協力して進める」ことをねらっています。当番活動開始当初は、グループの友達に声をかけてもなかなか来てくれないと、始めるまでが大変であったり、遊びたい気持ちのほうが強く途中でいなくなってしまう子がいたり、グループの友達が全員そろっていなくても始めてしまったりなど大変な活動でした。

同じグループの友達に「なかなか集ってくれないと困る」「途中で○○くんがいなくなったから大変だった」と言われる経験をしたり、自分たちが掃除をした後の動物が気持ちよさそうな姿を見たりする中で、今のような姿が見られるようになってきました。今、一番気をつけなければと思っているのは、当番活動が「義務」にならないようにすることです。

「きれいにしてあげると動物が喜ぶ」、自分たちがお母さんに世話をしてもらっていることを思い出しながら「幼稚園の動物さんのお母さんは自分たちだ」という優しい親しみの気持ちをもって取り組んでいけるように、教師自身が動物を大切にする気持ちをもって動物とかかわるようにしています。

ごっこ遊びの件ですが、今子どもたちの遊びを見て

いると、力の強い（イメージやアイデアをもっていてリードしている）子どもの思いや考えで遊びが進んでいることが多くあります。リードしている幼児のイメージや考えを認め、よさを引き出していくと同時に、そうした子どもについていっているほうの子どものつぶやきや言葉、動きを拾い、リードしている幼児にそのよさが伝わっていくようにしていくことで遊びの目的を共通にし、イメージを共有していけるようにしたいと思っています。

また、強い口調で自分の思いや考えを伝え、相手が何も言えなくなってしまったりする姿があります。教師が近くにいると、あまりそのような言葉は聞こえてきません。子どもたちも教師の存在を気にかけているようです。教師が気配を消し、細かいところまでしっかりと見取り、援助していく難しさを感じています。強い言葉で言った時の相手の表情を見たり、気持ちを聞いたりすることで「相手がこんなにいやな気持ちになった」ということを感じていけるよう援助していき、相手の気持ちを考えた言い方やかかわりをしていきたいと思っています。

……ふたたび観察者から保育者へ

保育者の援助の加減の難しさを、先生のお返事から十分感じ取ることができました。

観察後、園長先生と少しお話しした時に、今はA子がグループの中心的存在に見えるが、四歳のころは、B美のほうがみんなを引っ張っていたと聞きました。B美は、片づけ場面を見ていても、マイペースで少し幼い印象がありましたが、どうでしょうか？

……ふたたび保育者から観察者へ

B美は、入園当初から比較的誰にでも親しみを感じ、自分から話しかけたり、保育者が投げかける活動に進んで入ってきたりする幼児でした。また、体を動

かして遊ぶことも大好きで鉄棒ができたり、走ることが速かったりします。手先も器用で、作ることにもじっくり取り組んだり、遊びに必要なものを考えて作ったりする幼児です。A子は、そんなB美にあこがれの気持ちをもち、B美のしていることを自分もできるように繰り返し挑戦したり、ついていったりしていました。

私は、A子が自信をもっていくことで自分を出していけるよう、A子の頑張りや考えを認めるようにしながら援助してきました。そのような過程を通し、どんどん自分でしたい遊びをしたり、しっかりと自分の思いを伝えながら遊ぶようになってきたりしています。今はその出し方の加減が強すぎたり、自分とはペースの違う子どもに対して、じれったく感じたりしているように感じます。B美は、年少時からのA子とのかかわりを通し、A子への親しみの気持ちが増したり、尊敬する部分が出てきたりしています。B美は、「○○ちゃんって、△△がとっても上手だね」など友達の良いところを認めることのできる、気持ちの面でも育っている幼児です。また、自分の尊敬する人に自分が受け入れられなくなることが怖く、はっきりと言えなかったり、否定されると泣いたりする部分があります。B美にはその課題を乗り越えていけるよう援助しています。二人のそのような育ちの部分が現れた遊びの場面であったように感じました。

観察に来ていただいたことがきっかけで、二人の関係がどうして今このようになっているのかを育ちの過程を通し、私なりに推察する機会となり、援助の方向を改めて考えることができました。

観察者　浜口順子（お茶の水女子大学大学院）
保育者　小島友希（目黒区立ひがしやま幼稚園）